

たけのご幼稚園とラジオのおっちゃん(12)

しょうごもり
庄籠

道子

ありがとう、おっちゃん —あとがきにかえて—

私は五年半、幼稚園の先生をして働いていました。そのうち、四年間勤めたところが、このお話の舞台となった幼稚園です。

おむかいにある保育所(お話の中ではたけのご保

育所)で一年から三年間過ごした子どもたちが、この幼稚園には入園してきます(保育所に行かなくて幼稚園に入園する人もいました)。そして、一年間を過ごした後、お隣にある小学校(お話の中ではた

けのこ小学校)へと巣立っていきます。

一年目は十七人、二年目は二十二人、三年目は二十一人、四年目は十八人の子どもたちと、この幼稚園で過ごしました。たくさん遊んで、いっしょに笑ったり、怒ったり……とつても楽しい四年間でした。

この幼稚園には、本当に『ラジオのおっちゃん』と呼ばれるおっちゃんが、毎日のようにやってきました。そう、このお話に出てくるエピソードは、ほとんどが本当にあったことなのです。ただし、四年間で七十八人いた子どもたち、みんなに登場してもらうと大変なので、幼稚園の子どもは、十八人だけにしました。たとえば、三人組の中のりょうたは、ふたりの男の子がモデルです。ふたりをひとりにしたわけです。あいことなみかも何人も女の子がモデルになっています。

勤めて三年目の七月に、こんなことがありまし

た。

一学期もあと何日かで終わりという日のお昼ごろでした。もう短縮授業になっていました。幼稚園の子どもたちはもう帰りました。私たち職員(このお話の中でいうと、竹田園長先生と田原のおばちゃん)と私・籠先生の三人です)は職員室で仕事をしていました。

幼稚園の前の道を、南村(仮名)の一年生の子どもたちが七人、二列に並んで帰っていきます。私たちが手を振ると、「せんせい、バイバイ！」と手を振って応えてくれます。背中にはランドセル、手には鍵盤ハーモニカを持っています。夏休みに家で練習するようにと持って帰っているんですね。

一年生は、学校に行く時は村で集まって上級生といっしょに行きます。六年生が一生懸命お世話してくれます。帰る時は、四月ごろは、小学校の先生が各村ひとりずつついて、送ってもらっていました。幼稚園の時は、おうちの人や当番のおばちゃんといっ

しよに登降園してましたから、子どもたちだけで帰るようになってから、まだ二か月とちよつとしかたつていないわけです。自分たちだけで帰ることができるようになって、すごいなあと、私たちは見送っていました。

あの学年は、南村の子どもたちが七人。「特別多いわね」と職員間で話をしていました。あの中のようこう・たか・しょういち（みんな仮名です）の三人の男の子は特別元気もので、保育所の頃は、すっぱだかで自転車に乗って村中を走り回っていたのだそうです。幼稚園の時も、よく元気に遊んでいました。竹馬も得意で、大人の背くらのところに足を置く高い竹馬に乗れるようになり、地方局のテレビがインタビュースタにきたのでした。

そんな話をしていると、ようこう・なな・ゆうたの三人が幼稚園に駆け込んで来ました。

「どないしたん？」

「先生、ひろしくんが、おなか、痛いって」

はあはあ言いながら三人は口々に言います。

「そら、えらいこつちゃ。どこ？」

「こつち」

私は、三人について走ります。幼稚園のかどを曲がって少し行つた道のはた、田んぼの横の電信柱の所にひろしとたかとりりがいました。ひろしは電信柱に抱きつくようになっています。たかはその隣で、背中はもちろんお腹にも右腕にも左腕にもランドセルをかけて仁王立ちしています。りりが左右両手に鍵盤ハーモニカを持って、ひろしに寄り添うようにそばに立っていました。

「ひろしくん、おなか、痛いん？」

「うん」

苦しそうです。

「トイレに行きたいんとちがう？」

「ううん」

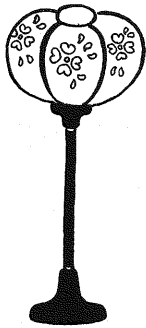
「そうか……どうしよう。とにかくおうちに帰ろうか。歩ける？」

「うん」

「じゃ、先生がおんぶするわ」

私がひろしをおぶいました。たかが左右の腕にかかえていたランドセルは幼稚園に走ってきたゆうたとかなのものでした。ふたりは自分のランドセルを背負います。だけど、たかがお腹にかけているランドセルはひろしのもの。ひろしをおぶっている私ももう持てないし、まだ一年生のたかに二つのランドセルで歩くのも無理。困ったな。どうしよう。

すると、幼稚園とは反対側からしょういちが走ってきました。よっぽど必死で走ってきたのでしょう。しょういちには、はあはあと苦しそうに息をはきながら、



「今……おかあさん……車で……来るって」

と、やっと言いました。しょういちの家は、その四つ角のむこう。おかあさん呼びに行ったのですね。しょういちにはランドセルを家に置いてきたみたい。

「しょういちくん、ひろしくんのランドセル、背負って」

「うん」

しょういちには、さっとひろしのランドセルを背負いました。さあ、出発。

四つ角の信号を渡った時に、しょういちのおかあさんの車が見えました。信号を渡って橋のたもとに来た時に、しょういちのおかあさんの車が横付けされました。

「先生、すみません」

しょういちのおかあさんは、まるで自分の子どもが世話になったみたいに言いました。私は、車の座席にひろしをおろしました。ひろしのランドセルを

背負ったしようにちが隣に乗り込みました。りりこが、ひろしの鍵盤ハーモニカをしよういちのおかあさんに渡しました。

「先生、ありがとうございます」

「いえいえ、あと、よろしく願います」

車を見送って、ほかの子たちと別れて、私は幼稚園に戻りました。職員室で報告したら、

「えらいねえ。南村の子たち、みんなで一致団結して」

とふたりとも感心しました。

あのままひろしの家に行って、ひろしのおかあさんが留守だったらどうするんだろう、とふと思いましたが、でも、しよういちのおかあさんは、まるで自分の子が世話になったように言いました。南村のおかあさんたちがみんな行ったり来たり仲よしなのを知っています。何も心配いらないと思いました。

しばらくして、ひろしのおかあさんから電話がかりました。どうやら三日ほどうちが出ていな

かったらしく、トイレに行って、けろりと良くなつたそうです。ひろしのおかあさんは翌日わざわざ幼稚園までお礼を言いにみえました。律儀な方です。

そうそう、翌日、小学校のアスレチックに遊びに行つた時、ゆうたやようこうたちがいたので、

「きのうは、えらかったねえ。みんなで協力して」とほめると、ゆうたがまじめな顔で、

「うん。ひろしくんな、三年もうんちがたまつてたんやて」

と言いました。私は吹き出してしまいました。

この話を、私は家に帰って、夜、夫に話しました。夫は、

「今どきめずらしい子たちだなあ。昔は当たり前やったけど。昔はどの村にもガキ大将がおつて……」

と話してくれました。「昔は当たり前やったけどなあ」そのせりふ、どっかで聞いたなあと思いまし

た。

そうだ。ラジオのおっちゃんの話いろいろなにしたら、何人もの人から、

「昔はいた、いた。そんな人。私が小さい時にも……」

と、いろいろなおもしろい人の話を聞いたのでした。

たけのこ村には『昔』が残っているんですね。たいていの子どもがおじいちゃん・おばあちゃんと同居しているか、すぐ近所に住んでいます。きょうだいが多く、三人きょうだい・四人きょうだいもたくさんいます。小学校の運動会には、老人会も婦人会も消防団も……村中の人が集まったような騒ぎです。小さな子を連れて歩いていると、いろいろとお声がかかります。どこの子か、みんな知ってるみたい。誰かが亡くなると、近所の人が集まってお葬式をします。お菓子がもらえるので小さな子どもお

葬式に来ます。小さな子からお年寄りまで、村中の人が両脇に並んだ道を、霊柩車は出発します。村中の人がお見送りするんですね。公民館で炊き出しもします。

そんな五十年前の日本なら当たり前だった『昔』が、たけのこ村にはまだ残っているんですね。その『昔』の村の包容力が、ラジオのおっちゃんを支え、子どもたちを仲よくたくましく成長させてくれるでしょう。

もちろん、『昔』は何もかも良かった。『昔』に戻ろう。なんて言いたいわけではありません。女性には選挙権のない『昔』もありました。親が決めた、顔も見たことのない人と結婚するのが当たり前という『昔』もありました。お国のために、一人ひとりの命が犠牲になった『昔』もありました。アジアの国々に行って、たくさんの人を殺した『昔』もありました。そんな『昔』には、けっして逆戻りして

はいけないのです。

村の中の子どもたちが、みんなで野山を走り回って遊んだ『昔』。おとなたちが、自分の子もよその子も、いっしょに世話をして、悪いことをしたら同じ様に叱っていた『昔』。一人暮らしのお年寄りがいいたら、近所の人たちがおかずを持ち寄ったり、家族のようにお世話した『昔』……。

『昔』を維持するのって大変なことがいっぱいあるんだと思います。維持するのが簡単で楽なら、日本中に『昔』が残っているはず。違う世代の人と暮らすことは、やはり腹が立つことやらつらいことやらあると思います。隣近所の視線がうっとうしいことも多いでしょう。だけど、たけのこ村の人たちは、やってきたのですね。けんかもしたかもしれないし、ぐちを言い合ったり、ひとりで泣いたり……いろいろあったらうけけれど、だけど、わずらわしくても捨てないで、日々を暮らしてきたのですね。

実は、私は、たけのこ村の隣の校区に住んでいます。たけのこ村にとてもよく似ています。この村にも『昔』が残っています。いいところですが、でも、違うところがあるのです。

私の娘は、小学校三年生の時に転入したのですが、やれ、制服のブラウスのえりに模様がついてるだの、くつしたに線が入ってるだの……少し人と違うとすぐ責められました。あまりのうっとうしさに娘は学校に行けなくなりました。

たけのこ小学校には制服がないし、変わったかっこうをしていても、人と違っていてもそんなに責められることはないように感じます。

たけのこ村は、ラジオのおっちゃんを支えてきました。そして、おそらく、おっちゃんを支えることで、知らず知らずのうちに村の包容力をより大きくしてきたのではないかという気がしているのです。その包容力の大きさは、村の子どもたちを、こんなにしあわせにしています。

大阪の池田の附属小学校で、何人もの子どもたちが殺されてから、幼稚園も小学校も保育所も「安全管理」にまします気を使わなければならなくなりました。たけのこ幼稚園の門も、今までは大きな門は子どもが全員来たら閉めていましたが、横の小さな門は開けっ放しでした。事件後は小さな門も閉めてかんぬきをかけるようになりました。

ラジオのおっちゃんが出来なくなったらいやだなと思いましたが、でも、心配いりませんでした。

おっちゃんは「鍵」が、とても得意なのです。するつとかんぬきを開けて、今までどおり遊びに来てくれます。保育所も小学校も同じです。

「知らない人が幼稚園に入ってきたら、すぐに先生に知らせてね」

子どもたちに話しました。子どもたちは大きくうなずきます。

今までも、業者の人とかが入ってくると知らせて

くれていました。あやしい人影に、私たち職員は目を光らせます。

ラジオのおっちゃんが小さな門のかんぬきを開けて入ってきます。子どもたちは何も言いません。当たり前前の顔で遊んでいます。

初めて見たおまわりさんがパトカーに乗せて連行してしまうほどの風貌のおっちゃんだけど、たけのこ村の子どもたちにとっては、「知らない人」でも「あやしい人」でもないのですね。小さい時から見慣れた、「知っている人」なのです。

「おっちゃん、おはよう」

当たり前前の顔であいさつする子どもたちを見ながら、私は、みんなが少しずつ努力をして『昔』を維持してきたことのごさ・大切さに、心から感動します。

(保育研究グループ はるにれ)

☆この連載は今回で終わります。